

ないが、動詞で体のペアがあるものについてはすべて完了形で、名詞は（民族名を除いて）男性形で、それぞれ代表させてあって、コンラドの『和露大辞典』と同じ方式になっている。コンラドの辞書はロシア人のためのものであるからそれでいっこうに構わないであろうが、我々日本人読者としては改めて露和辞典を引き直す手間をのっけから強いられることになる。のみならず、特に動詞に関しては、用例で完了体が出てくるケースはいくらでもあるので、訳語と用例との有機的関連という点から見ても問題は残る。

訳語と用例の有機的関連についてさらに言えば、訳語で出してあるロシア語が用例の中でほとんどあるいはいっさい使われていないというケースが少なくない。当然のことながら、見出し語に対するロシア語訳語だけで当該見出し語の多様な用例をロシア語に訳すことは不可能で、与えられた訳語を使用しないケース（いわゆる「訳し変え」）はいくらでも出てくる。しかしながら、訳語が用例のロシア語訳にほとんどあるいはいっさい出てこないという記述構成は、読者からすればこれまた宙に迷うことになる。マイナーな見出し語およびマイナーすぎる語義は思い切ってカットしてでも、ふつうの見出し語および語義に関しての用例をもう少し増やして訳語との有機的関連を工夫して欲しかった。場合によっては、訳語なしでいきなり用例というかたちの簡略化があってもよかったのではないか。

いずれにしても、日本語を見出し語とする和露辞典の編纂は、日本語としての用法の多様性を踏まえて、最終的にロシア語との双方向調整を計るという大変な作業で、編纂の基本理念にしたがってどこかで妥協しなければ完成にこぎつけることはまさに至難の業である。その意味で、10年余りの期間でこれだけのものを完成された編者藤沼貴氏ならびに研究社編集部の想像を絶する努力に心からの敬意を表する。そもそもにおいて辞書の書評などというものは「言うは易く行うは難し」の最たるもので、本稿は利用者の立場からの感想を思いつくままかつ真面目に述べたに過ぎない。

最後に、ネイティヴスピーカーによる校閲について言えば、ロシア語そのものおよび特に日本語との照応性のチェックに校閲者が具体的にどう関わったのかが気になったのは、日本人である評者ひとりではないことを蛇足ながら付記しておく。

（よねしげ ふみき・東京大学）

狩野亨, K. メドヴェートキン著
『露和对訳 現代ロシア話しことば辞典』
日ソ, 新時代社(発売), 2000 年, 643+viii 頁

V. ミグダリスキー
木村崇 訳

広く認められていることだが、「卓越した力強い」ロシア語の有する話し言葉の語彙や言いまわし、俗語の量は膨大な数にのぼり、しかもそれらは他のどんな言語にも逐語的に翻訳するには適さないものばかりなのである。

「俚諺」とか「どうにも訳しようのない伝え話」、およびその類と解されるものはしばしば「罵詈」「雑言」あるいは「隠語」と同列にあつかわれるが、旧ソ連邦諸国では、口語表現はかならずしも「罵詈」「雑言」あるいは「裏稼業隠語」「兵隊スラング」ばかりではないということを断っておきたい。いわゆる「ロシア語辞典」から排除されているものには、ほかにも「うがち文句」や「ことば借り」「むかし喩え」などの慣用化した表現がどっさりあって、その出どころはロシアあるいはソ連の文化史に底深く根ざしているのである。そこにはまちがいなく、現代ロシア話し言葉が形づくられていく中、ソビエト史（ソ連邦に生きた庶民の思考方法や生活条件、さらにはソビエト文学やソ連映画）の70年としてはっきりとした足跡が残されていることは、疑いえないのである。

ロシアや他の旧ソ連邦諸国では近年「ロシア四文字語」とか「裏稼業隠語」等と目されるものを取りあげた出版物の刊行が盛んになっている。ほんの10年か15年ほど前のソ連邦では、内務省や法務省の庇護の下での研究があり、さらには熱意ある数少ない言語研究者の「スラング、隠語」分野の研究も進められてはいたのだけれど、この種の出版はまったく不可能だった。西側諸国のロシア語研究者による研究成果に触れることも非合法な形でしかできず、「サミズダート」のカーボン・コピーが入手できた場合にかぎられていた。

最近出たこの種のある出版物の表紙にも、「…本書はきわめて猥褻な内容の引用、野卑で下品な語彙や言いまわしを含んでおります。この資料がもしあなたの倫理、宗教あるいは慣習にそぐわないばあい、またことに18歳未満の方のばあいは、けっして本書をお買い求めにならないで下さい！」などと書かれているほどである。

このことから言えることは、こうした出版物は大部

分が「悪罵」集であって、またそれらのほとんどが使用者本人の人格を傷つけるもので、公共の場では許されないような「卑猥なののしり語」と同一だということである。これらの単語やいいまわしは、「規範的」ロシア語の語彙素とはなっていないものの、しかしたしかに存在しているのである。

ののしり語を一番たくさんもっているのはなんといってもロシア語だという、ステレオタイプな考えが牢固としてあるが、もっと正確を期して言うなら、ロシア語の文法構造が多面性を有するのは、その根底に千変万化する派生語があるからで、またさまざまにそれらを適応させた表現の種類が豊富にあるからなのである。

旧ソ連邦諸国で今日までに出版された露和辞典のうちでもっとも大部なものは、S.F. ザルービン、M.A. ロジェツキンの『露和辞典』(ロシア語社、モスクワ、およびナウカ社、東京)である。この辞書はソ連邦で出版されたために、「公式」言語の枠をはみ出すような語彙は万に一つも含まれてはならなかった。語彙の数でいうなら、日本において研究社と岩波書店から出版された二冊がもっと充実していて、ロシア語の「ののしり語」と「俗語」の大部分が収録されている。だがそれでもなお、これらの語を手をかね品をかねて使うやりかたとか、「うがち文句」や「ころし文句」で、表現が豊かすぎて翻訳できそうもないものなどはちの扱いを受けているのである。狩野、メドヴェートキン両氏の著した辞書は、日本の読者にたいし、ロシア話し言葉のもつこれらの諸相のすべてを完膚無きまでに解明している。

喜ぶべきは、この辞書が現代ロシアと、ロシア語でやりとりする機会の多いほかの旧ソ連邦諸国においてよく使われる口語成句表現を採りあげていることである。けっして「ののしり語」だけではなく、過去および近年の、毎日の生活のいたるところで出会う「ユーモア」もあるし、「冗談」や「ころし文句」もあるというぐあいなのだ。

この辞書は著者たちの10年以上にわたる、手間ひまを要した研究のすえ、ついに世に出たのである。収録された現代ロシア話し言葉の単語および表現の見出し語総数は約14,700にのぼる。本書の特徴をあげれば、「翻訳不可能なロシア的伝え話」という共通名称のもとに集められた語彙が豊富だというだけでなく、日本の読者のために大部分の文句にたいして多数の例文が添えられ、懇切丁寧な解説がほどこされている点であろう。

あわせて指摘しておきたい点がある。それは、本書

でお目にかかる多くの単語に直訳がついていないことからわかるように、この参考図書は第一に、基本的な文法力と語彙力がすでにあり、ロシア語の基礎をマスターしている人たちを想定しているということである。単語のもつあらゆる意味あい、転義や皮肉のあることまでも考慮に入れて網羅することなどという不可能なことは、言うまでもない。しかもおそらく読者が本書をのぞいてみるのは、そのような語彙はすでに知ってはいるが、ふつうの辞書では翻訳に困難をきたしたからこそのはずなのである。たとえば《авангардизм》《аптека》《кошмар》《кредо》《сидеть》などといった単語であるが、直訳の語義はどうぜん知っていなくてはならない。でなければ、《твой авангардизм》《точно как в аптеке》《хорошо сидим》などというような発話は、たとえ日本語によるくわしい解説があったところで、語のもともとの語義との関係は見失われることになるだろう。というわけで、学習目的で初級者にこの辞書を使用させるのは、実際上不可能だとは言わないまでも、かなりの困難をともなうだろう。ロシア語や、旧ソ連邦諸国の文学、文化を学ぼうとする初心者への助言としてお勧めしたい点、それは、さきにあげた辞書のいずれかを本書と併用すべきだ、ということである。

発話では多くのばあい、たとえある種の持続的な語結合があっても、日常の生活においてはそれらの多くが冗談や皮肉や嘲笑を込めて、まったく反対の意味で使われることが、まことに的確に解説されている(例: вумный как вутка [冗・皮] おまえってやつはおつむが弱い、など)。

この辞書の語彙のなかでかなりの部分を占めるのが、犯罪社会や牢屋で使われる隠語で、これは意味理解のはなはだ困難な語であり、文例を書いている著者自身にとってもそうであったはずだ。

したがってもっとも注目していただきたいのは、相当数にのぼる「うがち文句」や冗談、小話などの意味が、この辞書の著者たちによってどれほど絶妙かつ正確に伝えられているかということである。

この点で第一にとりあげるべきは、19～20世紀の文学作品からの引用である。

《Свежо предание, да верится с трудом. いい話だがどうも信用できない》(А.Грибоедов 《Горе от ума》); 《Из лесу вестимо. 森からに決まっている(Откуда? 《どこから》と尋ねられて、はっきりと答えたくないときに単なる冗談として用いる)》(Н. Некрасов 《Мороз-Красный нос》); 《Не спится, няня: здесь так душно. 「眠れないわ、婆や、ここはとても

息苦しいの」の同音性を遊んだ酒のペースが上がってきたときの冗談》(А. Пушкин《Евгений Онегин》)；《Поле чудес в стране дураков ばかもん国の不思議な畑（やることなすこと全てがちぐはぐでばかげており、何が起るかわからない、また何が起っても不思議じゃないことの例え、しばしばソ連や混乱期のロシアの形容に用いられる）》(А.Толстой《Золотой ключик, или приключения Буратино》)；《Дело было вечером, делать было нечего [冗] それはなんにもやることのない晩のことだった（何もやることなく手持ちぶさたな状況につき）》(С.Маршак)；《Лед тронулся, господа присяжные заседатели [冗] 氷が動き出しましたぞ、陪審員諸君（待ちに待ったことが始まったと言う意味）》(Ильф, Петров《Золотой теленок》)などがそれにあたる。

《В Греции всё есть (кроме грецких орехов) [冗] (クルミ以外) ギリシャにはなんでもある（そちらの生活は、そちらでは品物は出回っているか、などの質問に、お尋ねのところはすべてうまくいっています、といった意味でよく用いられる表現）》だとか、《Спокойно, Маша, я Дубровский [冗] 落ち着け、マーシャ、おれはドゥブロフスキーだ（慌てるな、静かに、落ち着け、という意味で用いる）》，あるいは《Огласите весь список, пожалуйста. [冗] どうかりストを全部公表してください（内容を全部教えてくれというときの冗談）》などは、その言いまわしの出典となっているものが、映画の『コーカサスの女捕虜』『「ウィ」作戦』『運命の皮肉』だったり、動画だったり（カルルソンとか郵便配達夫ペーチキンといった登場人物）、また A. ライキン、Yu. ニクーリン、P. カルツェフ、その他大勢の優れたお笑い・諷刺系タレントの名前だったり、旧ソ連邦諸国で流行しほとんど全国民的なものとなった A. ガーリチ、V. ヴィソツキー、M. ズヴェズジンスキーの歌の歌詞であったりする。これらのすべてが、この辞書ではお目にかかれるのである。

外国語マスター度が最高水準に達していることを示すものは、俗語や冗談、「うがち文句」等の口語をどれほどよく理解しているかであろう。ロシア語のさまざまな表現を翻訳しようとする際、雪隠詰めにされたような状況に陥ることがよくある。外国人にとって、冗談とか小話などは理解がむずかしいものだ。このむずかしさは第一に、もともと翻訳困難なある種の語が存在することからきているが、第二に、口語表現の大部分には「二重の意味」、つまり隠れた意味がそなわっていて、それを一般的な辞書の該当する語義に厳密に

対応させて翻訳することは事実上不可能だからである。

本書は日本のロシア文学研究者にとって必須だが、旧ソ連邦諸国の日本文学研究者にとっても、同等の必要性を有する。また、なんらかの事情があって旧ソ連邦諸国に長期の研修に出かけるすべての人々にも、推薦されてしかるべき書物である。

これほどユニークな参考図書を作っていたいただいたことにたいし、著者の両氏には最大の讃辞を捧げたいと思う。

※本稿は、Japanese Slavic and East European Studies 21 (2000): 123-27 に掲載の書評（ロシア語）の翻訳である。

(Мигдальский, Владимир・オデッサ国立大学,
きむら たかし・京都大学)